



ガンバ大阪スキャンビオカップ／ スキャンビオ関西交流大会

2007年にガンバ大阪のホームタウンである高槻市の新阿武山病院の院長先生より、高槻市で活動する精神障がい者のフットサルクラブにガンバ大阪として協力してもらえないかとの依頼をいただき、クラブスタッフが練習を見学させていただきました。そこで、健常者との区分けがつかない現状を目の当たりにし、心の中に悪しき偏見が存在するとの気づきから精神障がい者の社会復帰を目的としたアカデミーコーチによるサッカー指導を開始したことがきっかけです。その後、練習だけでなく、チームを組んで試合をしたいとの要望があり、イタリア語で「交流」を意味するスキャンビオと名付けたフットサル大会を開始し、昨年で12年目を迎えました。

- 活動場所** : ノア・フットサルステージ茨木 大阪大学グラウンド「すいらん」
- 取組テーマ** : 交流人口・関係人口の増加
- 協働者** : 企業／NPO／学校
- 協働者名** : 特定医療法人大阪精神医学研究所新阿武山病院、
NPO法人日本ソーシャルフットボール協会、国立大学法人大阪大学、
大阪成蹊大学、平成医療学園専門学校

活動で工夫した点

2007年から5年間、アカデミーコーチによるサッカー教室とは別にスキャンビオカップ（フットサル大会）を実施していましたが、2012年から大会ではなく参加者同士の交流を目的とした交流試合を開始いたしました。そこでは、アカデミーコーチも試合に参加し、勝敗は関係なしにみんなでサッカーを楽しみます。チーム参加ではなく即席でチームを組んで試合を行うため、選手同士でのコミュニケーション向上に役立てられます。

活動で大変だった（苦労した）ポイント

身体的な障がいとは異なり、外見で精神障がいの有無を判断することは困難です。また、アカデミーコーチは普段健常者の子どもたちを指導しているため、どのように接したらいいのか悩みました。とりわけ当事者への言葉の使い方や、指導方法に苦労いたしました。

クラブや地域の活動後の変化

クラブとして障がい者スポーツに取り組むことにより、普段の生活では接することの少ない障がい者への理解が深まると同時に、精神障がいに対する垣根を取り払うことができました。



協働者の声

NPO法人日本ソーシャルフットボール協会真庭大典氏の声：開始当初は100名弱であった大会も回を重ねるにつれて参加者が増え、お互いの近況報告をする場としてのコミュニティーの役割や、この大会に参加することを目標にして日々の生活リズムを整えるなど、フットサル以外の部分での相乗効果が得られております。

参加者の声

・大会に参加するために、生活リズムを整え、練習をする時間を作るなどして色々なことを順序立てて考えられるようになりました。・自分たちの試合を応援してくれている人たちが沢山いることが本当に嬉しくて、今までそんなこともなかったので頑張ることができています。（茨木市在住の参加者）・1年に1回大阪へ行って試合をするのが楽しみで、帰りに大阪観光するのがさらに楽しみです。（九州からの参加者）

活動の「ここぞ！」というPRポイント

クラブとホームタウンの病院との出会いから始まったこの活動も12年間継続する活動となり、世界大会に参加するソーシャルフットボールの日本代表も参加するような全国規模の大会を開催するまでに広がりました。

補足

2007年の第1回大会に参加した方と昨年お話する機会があり、現在は地域で健常者の小学生サッカーチームのコーチとして活躍されているとお聞きました。この活動の最終目的である当事者が一般社会に出て普通に社会に溶け込んでいる事実を実感し、継続して取り組んできたこの活動のやりがい、達成感を味わいました。